

ネイチャー高知

No38 2012年1月20日発行

春の七草物語

奴田原 藻子

牧野植物園インタープリターとして、子ども自然体験教室での「春の七草教室」も13回目になる。毎年キャンセル待ちが出るほどの人気であるが、少しずつ参加者が世代交代しながらだんだん若年齢化傾向にある。今年も大半は就学前から低学年に限られていた。若いお母さん方が、こうした昔からの行事に関心を持ち、自然への理解を深めてもらうことは大変有意義なことではあるが、参加者の若年化に応じる教室の内容も、大幅に変革が迫られてきている。具体物を提示する語りだけでなく、より五感に働きかける工夫が考えられなければならない。そうしたことから毎年すこしずつやり方を変えながら、より子どもたちが楽しく体験できるようにと考えている。

七草教室では、まず材料集めが問題だが、特にコオニタビラコ（ほとけのざ）を五台山周辺の田んぼで見つけることはできない。高知市とはいっても五台山は、まだまだ田舎である。川の南側も、山の北側もまだ田んぼが広がっている。でも、あの立派で豊かな畦も水田の中の草もなく、ぼそぼそと稲の株が残っているだけである。今年は、いの町の田んぼでナズナとコオニタビラコをいただいてきた。我が家のナズナはもうペンペン草になっていたからだ。

セリは山すその谷沿いにまだある。竹やぶの中だから安心だ。でもハコベは蜜柑園の下草に沢山あるが遠慮する。ミカンに消毒をするからだ。ここのミドリハコベはみずみずしくてつい手を出したくなるほどだ。店頭七草パックにこのような品が入らないことを祈る。そのようなわけで「はこべら」と「おぎょう」は我が家の畑から採集する。それにしても、いろいろ考えた。江戸時代にはあったという「すすな売り」が、市中から消えたということはなんとも惜しいことだ。ナズナは薬効がいろいろいわれているが、それだけでなくビタミンB1が豊富、たんぱく質や糖類は、ホウレン草の2倍、カルシウムは3倍という優れたもの、しかも食べておいしい。なんでナズナを野菜として売り出す研究をしなかったのだろう。

またもうひとつ、毎年安全な七草を見つけることが困難になっている。田や畑の植物相の乏しさは、ちっとも改善されない。農薬や化学肥料は手をかえ品を変えてどんどん使われ、すごい農薬汚染の国という自覚がないままに日々が過ぎていく。

これから気温が上がってくると、紫外線ばかりでなく虫対策も要る。そこで登場するのが殺虫剤だ。農薬は気にするのに、同じ虫殺しの「虫除け」と言われるものだ。私は蚊取り線香派だが、この年寄りには、そんなことは問題ではない。問題は観察会に参加する、若いお母さんや子どもたちである。同じ殺虫剤をこのような若い人たちが、何の心配もなく使い続けていいものだろうか、放射能汚染は難しすぎて手が出ないが、農薬や、殺虫剤のことはもう少し知らなければと思っている。七草採集からだんだん外れてきているが、避けて通れない問題ではないだろうか。

さて元に戻って、色々限られるとなると、牧野の茶畑で採取できる、しかもお粥に入れてもいい野草の見本を、畑の隅でつむ。ノビル、カラスノエンドウ、ミツバなどだ。茶畑の入り口にはハマダイコンが繁茂しているから採取は問題ない。また、食べられないホトケノザ（シソ科）も、花の咲いているのを見つけて採る。あと、粥に添える酢かぶ（子どもに合わせて、細かくし型、トウガラシは入れず、七味少々ふる。米酢もみかん酢もきついで、今年作った柿酢に砂糖と塩少々）、紫芋の栗入りきんとん、こんぶと鰹節の佃煮（粥用のだしがらを利用）。これで前準備は終わった。

子ども自然体験教室 「春の七草さがし」

1月8日(日) 10:00~12:00

参加者 親子11組(子ども20人 大人13人)

ねらい

- 1、昔からの行事としての、七草粥の習慣を知る。
- 2、七草の呼び名と、実際の植物がどのようなものか実物にさわってしる。
- 3、七草以外にも食べられる野草を、茶畑で探し自分で採取する。
- 4、自分で摘み取った野草を、洗ったり、ちぎったり包丁で調子よくたたいたりしながら、「七草囃子」をおぼえ、みんなで楽しむ。
- 5、春の野草の味をしっかりと味わう。



七草囃子

七草なずな 唐土の鳥が
日本の土地に 渡らぬ先に
七草なずな 手に摘みいれて
ほーとととと ほーとととと

スケジュール

- *挨拶とおおまかな日程説明
- *ビデオ画面を見ながら、同時に実物提示による七草の説明
- *園地の茶畑に出て、野草を採取
(ノビル、ハコベ、タネツケバナ、ミツバ、ハマダイコンなど)
- *部屋に戻り野草を洗い、ボールに細かくちぎる。
- *大きいまな板に、ちぎった野草を集め、みんなで七草囃子を唱えながら、交代で包丁でたたく。
- *全員たたいて済んだら、あらかじめ作ってあるお粥にまぜ、ひとまぜしたら出来上がり
- *あつあつをいただく。(巡回して感想をきく。)
- *全員で後片付けのあと、感想文を書いて解散。



全員おいしく食べられた。きっと自分でつんだり、包丁でたたいたりした体験が、おいしさを呼び覚ましてくれたのではないだろうか、子どもばかりでなく、本当の七草を知らない大人たちも多く、良い体験が出来たと喜んでた。

まだまだ多くのことを、つい話してしまいがちになる七草ではあるが、子どもたちの発達年齢のことを頭におき、触覚と味覚を刺激する教室になるよう留意した。



おわりに

毎月1回、年間12回開催していたこの教室も、牧野の方針で、来年度から6講座になる。高知県内小中学生の学外授業において、植物園の活用をより促す取り組みを、いっそう強化していくことになり、従来の子ども自然体験教室の参加者が、幼児から小学低学年に限られることから従来の教室を3講座として、あと3講座は小学高学年、中学1年生向けと銘打って開催されることになっている。

より専門的な基礎を教えたいという牧野植物園の気持ちは理解できるが、今までせっかく楽しみに来てくれていた低学年や幼児、そしてそうした幼い人たちを持つ親の行き場所がせばめられるという、この現実を、なんとか別の方法で充実できないものかと、今模索中である。

樹の力

田城 光子

巨木、古木を訪ね歩くことが大好きなグループがあり、わたしも時々参加させていただく。おおかたは定年後の体力と時間をもてあましている人達であるが、現役世代の人もいる。樹齢何百年という風格のある巨木には、自分の人生を重ねるところがあるのだろう、梢を見上げたり、苔むした大きなウロのできた幹に触れたりしながら、樹勢があれば安心し、元気が無い樹木に出会うとさっそく治療を施す相談を始める。仲間には樹木医もいるし、彼を支える緑サポーターもいるので、相談はすぐにまとまる。すでにあちこちで、治療済みの健康を回復した古木が増えている。最近では、朝日新聞高知版に掲載されたのでご存知のかたもおられよう、三原村のサザンカ古木の手当てをした。そんな樹木を再訪し、喜びあったり、治療の継続の必要性などを検討する事もある。樹木の健康を気遣うことは、自分達の健やかな老後の日々を築くことにもつながっている。

梅雨明け、本格的な夏が到来した7月中旬。巨木、古木めぐりに出かけた。15か所をめぐり、どの樹木も甲乙つけがたい、りっぱな樹ばかりであった。渡された資料には、樹木名はもちろん、生育場所、樹高、根周り、推定樹齢などが記されているが、どうもこれが妖しいのである。例えば、樹齢300年あるいは400年とあるのはいいとして、299年というのがある。データは毎年更新されているとは思えないし、299年というのはどう考えてもおかしい。いつかは305年とかいうのがあって、この説明が「300年と聞いてから5年が経過したので305年である」というものだった。ある小学校の玄関前のセンダンの木は、樹齢300年となっている。しかし学校は創立130年だそうであり、センダンの寿命はそれほど長くない、という意見もでた。もしこの個体がうんと長命だとしたら、学校創立時にすでに樹齢200年近いセンダンを、どこかから移植したことになるだろう。樹木名からして、疑問が残るものもあったが、自分たちの樹木めぐりの本来の目的に大きな影響はない。種名がまちがっていても樹齢にさばをよんでいようが、そんなことはたいした事ではないのである。大切なのは、その場所に大きく根をおろし、風雪にじっと耐え、生き続けてきた事実、そしてそれらを守り続けた祖先の生き方なのである。

宿毛市坂の下にある地藏尊のオガタマノキは、資料によれば推定樹齢299年、樹高20m、

目通幹周3・4mとある。同じ位の大きさのムクノキと並んで生え、枝と枝をからませるようにしている。ちいさな階段を下りると松田川の川岸に出た。その流れの上に大きく枝を張り出している姿は、壮観である。春になれば甘い香りを放つ白い花が咲き、5月ころ、落葉が終わって新しくやわらかな葉が出ると、ミカドアゲハが産卵にやってくることだろう。

このような巨木、古木は、たいてい神社仏閣の敷地内にあることが多い。社寺林は神仏のすむ場所であるから、伐採が禁じられていて、古い樹木が残っている。鎮守の森にはシイ、カシ類の大木が多く、イチイガシもよく見られる。飢饉の時の食糧を確保するために植えられたものらしい。イチイガシのドングリは、ツブラジイやスタジイ



以布利のタブノキ 枝が左右に 15m、全体で 30m 広がって

に次いで美味しいドングリである。粘菌の研究で有名な南方熊楠は、明治時代に進められた神社の合祀に反対した。たくさんある神社をひとつにまとめることは鎮守の森が少なくなる事である。鎮守の森には、豊かな自然が残っている。合祀は自然破壊につながると考えた。南方は、日本の自然保護活動の先駆者だといわれる。

この日訪れたのは、他にイチョウ、満開の花をつけたホルトノキ、実のなったムクノキ、エノキ、カイツカイブキなどであった。わたしは冠婚葬祭、儀式が必要なときにだけ神仏におでましをお願いし、普段は神様を信じない、というずいぶん勝手な人間である。しかし、自然にだけは神様がやどる、と信じている。自然には、人間の力の到底及ばない生命力や造形美があり、それこそが神の領域だと思うのである。

自然しらべ2011 チョウの分布 今・昔 / 安芸での報告

松本 孝（自然観察指導員登録 NO. 17502）安芸市土居 981-3

私は平成 23 年の夏、高知県東部で児童たちが身近な自然に親しむ活動に 10ヶ所ほど関わらせていただき、その中で自然しらべのことを話し、チョウを見つけてみようと呼びかけました。

虫は好き嫌いがあり、私は写真を見せる前にチョウが苦手な児童がいないか確認し、児童たちが大慌てにならないように、苦手な児童がいる場合、見せ方や話し方を考えながら進めたことでした。

児童たちはアオスジアゲハ、ツマグロヒョウモン、黒いチョウは写真を見たときに反応ありで、ほとんどの児童は、このチョウを見たり捕まえたりしていました。

今回の自然しらべでは写真を撮るようになっていました。活動中は他のことをしているのでチョウが飛んできても見ると見ないだったので、チョウの写真を撮るぞと思い近くの安芸城跡へ行きました。

朝の時間帯が良いとのこと。資料に掲載されているチョウも含めてヒラヒラと何回も目の前を飛んでいきますが止まらないので、なかなか撮るにはなりません。ヒラヒラ飛んで花に止まったと思ったら、はばたいたまま。カメラ撮影の腕前などなく、なかなかうまくいきません。ほとんど下手な写真でした。

チョウが来るのを動かずに待っていると「ギーィ」と声。見るとコゲラがちょこちょこ動く姿が見え、木々の間をあっち行き、こっち行きする様子をぼんやりと眺めた夏の朝でした。



場所 高知市鏡 鏡ダム河畔（川口橋北詰集合）

講師 細川公子さん（当会副会長 土佐植物研究会所属）

スミレやジロボウエンゴサクなど春に咲く花の観察会です

野山での拾いもの

玄関のフンの落とし主は・・・

坂本 彰

タイトルどおりの「野山」でなく、我が家の玄関先での拾いもの話です。数年前から玄関に糞をするものがあります。私自身はあまりきれい好きではないし、そう頻繁に掃除をする習慣も持ち合わせていませんので、玄関にフンをされて憤慨するような狭い了見の持ち主でもありません。しかし、よそ様の玄関に堂々と糞をして平気(?)な顔をしている輩は何者かと少し調べてみることにしました。

まず疑ったのは隣の家をねぐらとしているコウモリ(アブラコウモリ)。道路を挟んで向い合せになっている隣家の玄関の上の、庇と壁とのごくわずかな隙間から、アブラコウモリが出入りしていました。隙間は極めて狭いもので、そこから生き物が出入りできるとは思えません。ところが、夕方になるとそこから手品のようにコウモリが現れ、外へ飛び立っていきます。このコウモリが、行き帰りの途中で我が家の玄関先に落としているのではないかと疑ったわけです。図鑑などでコウモリの糞を調べ、玄関のものと比較してみましたが、結果は「不一致」でした。

次に疑ったのはスズメ。我が家は古い家で、2階の屋根の瓦と野地板との間が棲み家になっているらしく、ベランダや屋根によく糞が落ちています。そこでベランダのスズメの糞と思われるものと玄関のものを比較するとこれも「不一致」でした。結局想定した2種はいずれも玄関の糞の落とし主ではなく、犯人は判らないままになっていました。

昨年の夏になって、身の回りの生きものも記録しておこうと、台所の窓によく現れるヤモリの写真を撮りました。窓ガラス越しに脅かしても全く驚かないヤモリも、背後に回られると危険を察知するのか、素早く逃げてしまい、いい写真にはなりません。下の写真がそれですが、まあヤモリと判っていただけでしょう。その時、窓の下のゴミ入れの蓋の上に置き土産があり、ヤモリの糞であることが分かりました。それは、大きさは違うものの、落とし主が分からないままになっていた玄関のものと同じ作りをしていました。長年探していた落とし主がヤモリであることがやっと判明しました。



写真左：写真中の糞の落とし主のヤモリ。頭から尾の先まで15cmほど。
写真中：台所外のもの。糞の長さは15mmもある。
写真右：玄関のもの。糞の長さは5mmぐらいで小さい個体のものである。

安芸城跡の白蓮 その後

松本 孝（自然観察指導員登録 NO. 17502）安芸市土居 981-3

■「平成23年 夏」その後の白蓮

例年と比べると成長があれ？と感じた安芸城跡のお堀の白蓮。
その後の様子を見ていたら、葉も伸びて大きくなっていました。

【平成23年7月24日】



【平成23年9月4日】



ハスの花は4日咲くと聞いています。
防災訓練の朝、咲きそうな花があるのを見つけ、その花を5日間、追ってみました。

【平成23年9月4日（朝）】



【平成23年9月5日（朝）】



【平成23年9月6日（昼前）】



開くようでまだ？

9月5日と6日は、以前に見て感じた「凜」とした姿を、今一度、見ることができたらと期待。この二日間、行った時間帯の花の様子は、私が思い描いていた姿ではなかったですが、その姿に、時間が過ぎるのも忘れて見ていました。

【平成23年9月7日（朝）】



明日あたり、散るかも

【平成23年9月8日（朝）】



花びらが散りました



地元の敬老会で白蓮の話をする機会をいただきました

● 他団体行事案内

どう守る三嶺剣山系の森と水と土－シカ被害対

策を考えるシンポジウム【日 時】 2012年1月29日(日) 13:30~16:30

〇

【場 所】 香美市立保健福祉センター香北 2階ホール (アンパンマンミュージアム東隣)

【内 容】

《基調報告》

シカ被害対策の全国的動向と三嶺・剣山系の課題

三嶺の森をまもるみんなの会代表/高知大学名誉教授 依光良三

《みんなの会からの報告》

報告1 防鹿柵設置の効果と希少種の保護 森の回廊四国をつくる会 坂本 彰

報告2 三嶺山系稜線部の自然再生の取り組み 高知大学理学部 石川慎吾

《特別報告》

獣医師からみたシカの取り方減らし方

わんぱーくこうちアニマルランド 早川大介

《質疑・応答・討論》 コーディネーター 奥村栄朗 (森林総合研究所四国支所)

【主 催】 三嶺の森をまもるみんなの会

【問合せ先】 依光 0887-56-2366 坂本 088-850-0102

マクロで見る草花の写真展

マクロレンズを通して見た野草の姿をお楽しみください。

【日 時】 2012年1月22日~2月20日

【場 所】 いの町波川 かんぽの宿伊野

【主 催】 下村憲一郎 (高知市塚ノ原43-5)

【問合せ先】 下村憲一郎さん 掛 「ネイチャー高知」の原稿を募集します

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の発行をしています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構です。しどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 38

事務局 780-8075 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp